

news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

2021 107



浜地清松《赤い帽子》1928年 当館蔵
「コレクション展 2020一春 特集：浜地清松」より

新収蔵

大家利夫コレクション

Ohie Toshio Collection

おおいえとしお
大家利夫は、本づくりの世界を探求しつづけている作家である。当館では2002(平成14)年に開催した特別展「山本容子の美術遊園地」で、山本容子の銅版画集制作を支えるスタッフのひとりとして注目。『A Christmas Memory (クリスマスの思い出)』の銅版画12点を収めたケースや、星の模様を金箔で散りばめた『シェイクスピアのソネット』特装本 (fig. 1) など、精巧を極めた大家の仕事は山本の軽やかな作品の魅力を一ときわ輝かせるものとして印象的だった。

そしてこのたび、大家利夫の代表作をはじめ、関連する作家の作品や資料199点を2019年度と2020年度に同氏からご寄贈いただいた。

大家利夫は1949(昭和24)年、東京で生まれた。子供の頃から新聞販売店や書店に生活の場を求め学校に通った。各家庭を訪問して百科事典を売る仕事を11歳から始め、17歳の頃には平凡社の百科事典販売コンクールで銅賞を受けるほどのトップセールスマンとなるが、その授賞式直前に退職したという。また国鉄の印刷室、印刷会社、製本会社でも働いた。いっぽう、15歳の時から限定本に興味を持つようになり、1967(昭和42)年、当時69歳だったオペラ歌手の藤原義江を帝国ホテルに訪ね、翌年に藤原の著作『きりすとの涙』の個人出版を実現させた。国鉄印刷室の筆

耕の協力を得て謄写版による書籍制作を試みている。あたえられた状況で能う限りの材料と技術を投入して作る、大家の本づくりの第一歩だった。

1969(昭和44)年に東京都立北多摩高等学校卒業後、1970(昭和45)年2月、20歳で渡仏。翌年から1973(昭和48)年までフランス国立エスティエンヌ印刷工芸高等学院 (École supérieure Estienne des arts et industries graphiques) で学ぶ。同学院は版画やグラフィック・デザイン、印刷、製本、編集創作等に至る書物制作のエリートを育てる美術工芸学校で、外国人には厳しい門戸であったが、そこで大家は箔押しと手工製本(ルリユール)のフランス国家資格(C.A.P. de dorure sur cuir, C.A.P. de reliure manuelle)を取得している。また工業製本科では、断裁機、折り機、騰り機、無線綴じライン等、工業製本全般の課程を修了した。

箔押しは書籍のタイトルや模様をフェールと言われる金型を用いてつける技術で、製本の中でも最後の仕上げとなる工程である。その箔押の技術に国家資格があるという、日本との違いにまず驚くが、そうした社会制度や価値観が大きく異なる世界に、大家は単身で飛び込み、フランスの伝統工芸について技術を高め、理解を深め、血肉化していったのである。手工製本という、辞書の訳語も覚えぬ領域で、そ

れはどれだけ大きな挑戦だっただろう。

パリのレストランでウェイターをするなどの苦学であったが、大家は技術を磨いた。エスティエンヌ在学中からフリーの箔押し師として仕事を始め、1973(昭和48)年から製本工芸の名品を生み出したことで知られるジベール・バレ・デザイン事務所 (Réalisations graphiques Gilbert Balé) で現代フランスにおける製本工芸の代表的な作家、ジョルジュ・ルルー (Georges Leroux) やモニク・マチュー (Monique Mathieu) らの作品制作を担当。その後、現在も活動を続けるデルモン・デュバル工房 (Établissements Dermont-Duval) のスタッフとして、ピカソ、ダリ、カルダー、エルンストらのオリジナル挿絵本、版画作品集の制作を担当し、本場の伝統工芸の職人たちと共に腕を磨いた。

4年余をパリで過ごし、1974(昭和49)年7月に帰国した。工房の作業台で立ち働く自分の動きが、流れるように作業する恩師のうしろ姿と重なるようになったのを感じ、帰国を決めたという。そして同年12月、大家利夫美術装丁工房を設立、1986(昭和61)年10月まで続ける。いっぽう1984(昭和59)年11月に指月社を設立。指月社第一作として気谷誠著『メリヨンの小さな橋』が1986(昭和61)年12月に刊行された。19世紀パリの銅版画家シャルル・メリ



(fig. 1) 大家利夫が製本した『シェイクスピアのソネット』特装本 1995年 訳：小田島雄志、銅版画：山本容子、装丁：渡辺和雄、発行：ガレリア・グラフィカ 個人蔵



(fig. 2) 大家利夫『ポール・ヴァレリー著、小宮正弘訳『書物の容姿』』『書物の容姿』の本文特装本 1999年 口絵・本文装画：柄澤齊、発行：指月社 当館蔵



ヨンに関する見識高いエッセイは著者による書き下ろしで、本文は特別に漉いた伊予奉書紙。組版は大家が最も美しいと選んだ共立社印刷所の活字で、本文に注を入れる日本初の試み。口絵を木口木版画家・柄澤齊に依頼して新作を入れ、メリヨンの銅版画を草木染めした紙にコロタイプで印刷。製本は当然のことながら大家利夫による仔牛革モザイク装、手編みの花ざれを付け、金箔押。紙製の差し函がつく。つまり指月社は本を構成する要素すべてに大家自身の考えと持てる力を投入し、形にし、世に送り出すために設立された個人出版社なのだ。

爾後、詩人の白石かずこと、白石の指名で決まったイギリスの美術家スザンヌ・トライスターの銅版画による詩集『羊たちの午後』(1996年12月折本刊行、1998年特装本刊行)、フランスを代表する装幀家ポール・ボネに寄せたポール・ヴァレリーの文章をまとめた小宮正弘訳、柄澤齊装画による『書物の容姿』(1998年10月折本刊行、1999年特装本刊行、fig. 2)、ボネがエステイエンスで行った講演をまとめた小宮正弘訳、渡辺和雄装画による『書物装飾・私観』(2000年5月折本刊行、2002年特装本刊行、fig. 3)、ヴァレリーの著作と清水洋子のリトグラフによる『海邊の墓地』(2004年10月特装本刊行)、画家O Junと共に実現させた石川淳の小説『紫苑物語』(2005年11月折本・特装本刊行、fig. 4)、日本現代詩の研究者で大家の理解者・親友でもあるジョン・ソルトの著作『北園克衛の詩と詩学 意味のタペストリーを細断する』(2010年思潮社より刊行されたものを原本に、2014年特装本刊行)と、7つのプロジェクトが指月社本として形にされた。

大家は詩人や小説家、翻訳家、画家、版画家、デザイナー、印刷工房、紙や皮革、布など素材メーカーの叢智を結集させるプロデューサーであり、紙を一葉ずつ綴じ、くるむ、製本の超絶技巧の持ち主であり、頒布会の運営もする出版人ともなって、指月社の本を手がけてきた。手工製本の世界で1冊だけを手がける作家はいるが、折本と特装本の両方を数十冊単位で自ら企

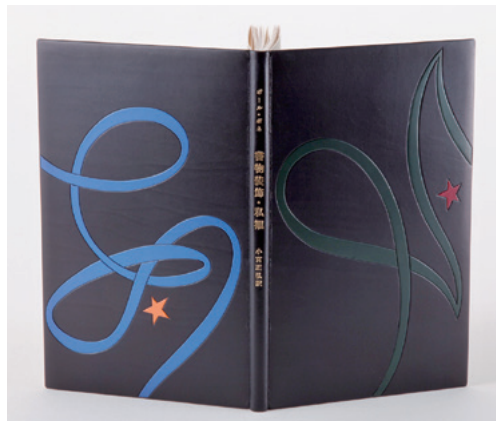
画頒布する制作者はほかにいないだろう。その業績は2012(平成24)年にロサンゼルス・カウンティ美術館で「Ohie Toshio and the Perfection of the Japanese Book/ 大家利夫と完成度を極めた日本の装幀本」展が同館の企画により開催され、紹介された。その後2018(平成30)年3月、指月社を解散したが、製本の仕事は現在も続けている。

今回寄贈を受けた大家利夫コレクションは、指月社から刊行された書物を中心に、大家の手に集まった柄澤齊や山本容子、久保卓治、O Junなど、本づくりで深く関わってきた作家たちの作品や資料である。ひと

つひとつが本とつながり、そのつながりがまた別の本へとつながっていく。

フランスの伝統的な手工製本を学び、それを日本で探求するために、大家は日本の工芸への造詣も深めた。印伝などの革細工、製紙、織物のみならず、陶芸や茶道における茶花、懐石、点心までもが大家にとっては思考を深めるためのきっかけになったようである。そうした大家の書物工芸の仕事は稀有であり、万人が知る世界ではないために、しっかりした評価がされてきたともいいがたい。

このたびの収蔵により、美術館として、今後展覧会などで紹介していく所存である。(井上芳子)



(fig. 3) 大家利夫《ポール・ボネ著、小宮正弘訳『書物装飾・私観』特装本》2002年 装幀：渡辺和雄、発行：指月社 当館蔵



『書物装飾・私観』の本文



(fig. 4) 大家利夫《石川淳著『挿絵本 紫苑物語』特装本》2005年 絵(ドローイング1点・リトグラフ11点): O Jun、発行：指月社 当館蔵



『挿絵本 紫苑物語』の表紙の内側と小口(手編みの花ざれと、内表紙に仔牛革モザイクと金箔押、ジャガード織機による縞子織りの絹地を詰め込んでいる。)

浜地清松のこと ニューヨーク、パリ、東京、和歌山

特集 浜地 清松

会期：2020(令和2)年5月8日(金)―6月21日(日)

昨年度、和歌山県出身の洋画家・浜地清松(1885-1947)を、浜地と交流のあった作家たちとともに紹介する展示を行いました。(※当初開会は4月25日でしたが新型コロナウイルス感染症拡大防止のため会期変更。)

和歌山県からは戦前、多くの人々が移民としてアメリカに渡っています。後に画家として活躍した人物としては太地町出身の石垣栄太郎(1893-1958)がよく知られていますが、浜地もそのひとりです。石垣の活動の場はほとんどがアメリカでしたが、浜地はアメリカからフランスに渡り、帰国後は日本の画壇で活躍しました。浜地の作品は現存が確認できるものがまだまだ少なく、画歴を追いかけることがなかなか困難な画家でしたが、美術館では2011年に代表作《赤い帽子》(表紙、図10)をようやく収蔵できたことをはじめ、少しずつ作品や情報を収集してきました。そして今回、回顧展とは言えないまでも、その足跡を振り返る展示会を、浜地の没後初めて開催できた次第です。

和歌山からアメリカへ

浜地清松は、1885(明治18)年、浜地松之助の次男として和歌山県東牟婁郡古座町津荷(現在の串本町)に生まれました。

津荷小学校、そして古座高等小学校を卒業後、1901(明治34)年、兄の清吉を頼ってアメリカの西海岸へと渡ります。働きながらサンフランシスコのサンノゼ・ハイスクールに在学中、描いた祖父の肖像が先生に認められ、ボストン美術館附属美術学校への入学を勧められて、転校しました。1909(明治42)年に卒業した後は、ニューヨークに向かい、服飾の図案デザインの仕事などをしながら絵画の勉強を続けました。ナショナル・アカデミー・オブ・デザインなどにも通ったようです¹⁾。

《暖炉》(図1)や、フラットアイアンビルディングを描いた《五番街》(今回不出品)(図2)は、現存する数少ないニューヨーク時代に描かれた油彩画です。ニューヨークでは、郷里に近い太地町出身の石垣栄太郎や国吉康雄(1889-1953)、清水登之(1887-1945)ら同地の日本人画家たちとも親しく交流し、紐育日本美術協会が主催する1917(大正6)年と1918(大正7)年の邦人美術展覧会にも出品しました²⁾。《五番街》は、おそらく1918年に開催された同展の出品作《FIFTH AVENUE》と思われます。『American Art News』Vol. 16 No. 18(1918年2月9日)の展評では、アメリカの画家フレデリック・チャイルド・ハッサム(Frederick Childe Hassam, 1859-1935)からの影響を指摘

されていますが、星条旗などがはためく都市風景を印象派的作風で描くハッサムと、確かに浜地の作品はよく似ています。

また浜地が所蔵していた『画帖』(図3)にも、澤部清五郎(1884-1964)やさまざまな作家の絵が残っており、交流の様子を伺うことができます。1920(大正9)年4月、浜地は、紐育日本美術協会が改称した紐育日本人画会の立ち上げには参加しますが、画彫会の結成(1922年)は待たずに、同年秋には日本へ帰国しました。

帰国、そして新宮にて

帰国後、浜地は故郷の古座より少し北東に位置する町、新宮で「新宮洋画研究所」を開き、絵を教えました(会員に深田穆夫、小林茂(後に清栄と改名)ら)³⁾。紀南の魚介類を描いた《静物》(図4)や《花》(図5)は、この時期に描かれた作品です。

1921(大正10)年5月には、鹿子木孟郎(1874-1941)が浜地を訪ねます。浜地の『スケッチ帳』(図6)には、「海岸に於ける鹿子木先生の写生振 大正十年五月之写」と書込があり、海に向かって座って風景を写生する鹿子木の姿が描かれています。鹿子木は1917(大正6)年11月から翌年の初めにかけて、フランスからの留学の帰途、ニューヨークに滞在した際に浜地と交流がありました。この時、国吉康雄が画室に鹿子木を招き、浜地も一緒だったことを回想しています⁴⁾。高峰議吉邸の室内装飾に関わった牧野克次や澤部清五郎、霜鳥彦之から京都の浅井忠に学んだ作家たちと浜地は親しく、その縁もあったかもしれません。鹿子木は1905(明治38)年に京都で共に関西美術院を創立するなど浅井忠とも深



図1 浜地清松《暖炉》1911年 油彩、キャンバス 当館蔵(古座町立津荷小学校寄贈)



図2 浜地清松《五番街》1918年頃 油彩、キャンバス 個人蔵

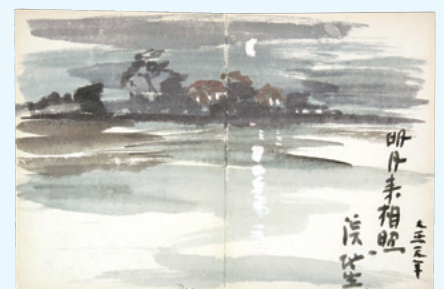


図3 浜地清松《〔Dreaming〕》1912年 水彩、紙 当館蔵(浜地洋二郎氏寄贈)

い関係がありました。

新宮洋画研究所での浜地の活動は、当地に新しい美術の風を吹き込み、油絵熱を起こしました⁵。後に日本の抽象絵画のパイオニアとなった村井正誠(1905-1999)も、新宮で油彩画を見る貴重な機会だったと回想しています。

再びのニューヨーク、そしてパリへ

浜地は、1925(大正14)年に再度渡米しますが、2年ばかりの滞在でした。1927(昭和2)年2月に、**紐育新報社主催邦人美術展覧会**(図7)に出品するなどした後、夏にはパリに渡ります。1920年代、パリは世界の美術の中心であり、多くの日本人画家たちがパリに集っていました(図8)。渦中に身を置き、日本人画家たちによる展覧会⁶にも出品しながら、パリ滞在中の浜地は大きな公募展(サロン)にも出品を試みます。なかでも「フランス美術家協会」主催の「ル・サロン」に《裸婦》(図9)が、「国民美術協会」主催の「サロン・ナショナル」には《赤い帽子》(表紙、図10)が入選したことは、浜地にとって重要な出来事でした。サロンのなかでも、当時多くの日本人画家が出品した、新しさを追求する「サロン・ドートンヌ」ではなく、保守的な傾向の強かった「ル・サロン」、「サロン・ナショナル」において、古典の伝統の中で通用する自身の力を試し、認められたことは浜地の自信にもつながったと思われます。帰国後の浜地も、この古典主義的な作風を継続しました。かつてフランスに留学し同じサロンでの入選経験を持ち、昨今の日本において「アカデミック」が反発を受ける状況を苦々しく感じていた鹿子木孟郎も書簡で、浜地の快挙を称えています⁷。

東京、和歌山での活動

1928(昭和3)年秋に帰国するとすぐに、浜地は10月開催の第9回帝展(帝国美術院展覧会)に《赤い帽子》を出品して特選となり、国内での評価を高めます。そして東京に居を構え、1929(昭和4)年には、**くりはらちゆうじ あおやまくまじ かたたくろう みくりや 栗原忠二 青山熊治 片多徳郎 御厨 純一 北島浅一 江藤純平らとともに、第一美術協会を結成**しました。《裸婦》(図



図4 浜地清松《静物》1921年 油彩、キャンバス
当館蔵(浜地洋二郎氏寄贈)



図5 浜地清松《花》1921年 油彩、キャンバス
当館蔵

11)は、第10回第一美術協会展の出品作です。

一方で、和歌山県ゆかりの作家たちとの交流も深まります。1930(昭和5)年、再結成された南紀美術会に参加し、1934(昭和9)年には、県観光協会の依頼により、**会員の大亦観風、建昌大夢、狩野光雅、園部邦香、木下義謙らと一緒に紀南や紀北を取材して展覧会を開催**します。1936(昭和11)年には、和歌山県下の洋画の発達奨励を目的とする伏虎美術協会を結成。会長の和歌山県知事のもと、木下孝則、川口軌外、裕伊之助、木下義謙、園部邦香とともに名を連ねています。

第一美術協会や帝展、新文展などを中心に活躍した浜地ですが、太平洋戦争勃発後は従軍画家として中国戦線を視察するなどし、戦争画も手がけました。そして1944(昭和19)年、戦時特別展への出品を最後に郷里に戻り、1947(昭和22)年、古座町津荷の自宅にて逝去しました。



図6 浜地清松《海岸に於ける鹿子木先生の写生振》1921年 鉛筆、紙
当館蔵(浜地洋二郎氏寄贈)



図7 紐育新報社主催邦人美術展覧会集合写真 1927年2月 『浜地清松旧蔵アルバム』より
前列中央が国吉康雄。その左が浜地清松。2列目、国吉と浜地のあいだに石垣栄太郎。



図8 パリの日本人画家たちの集合写真 1927年~28年頃 『浜地清松旧蔵アルバム』より
前列左から4人目に藤田嗣治。最後列左から2人目が浜地清松。



図9 浜地清松《裸婦》1928年 油彩、キャンパス 当館蔵



図10 浜地清松《赤い帽子》1928年 油彩、キャンパス 当館蔵



図11 浜地清松《裸婦》1938年 油彩、キャンパス 当館蔵

の近代美術が評価されるなかで、作品が埋もれがちとなった要因とも言えるでしょう。しかしその執拗な描写と画面構成は単なる古典主義にとどまるものではありません。浜地独自の不思議な魅力は、今後作品が発掘されるなかで、さらに再評価されるべきものと思います。今回の展示では、移民として和歌山から渡米したアメリカ時代、パリ時代、そして帰国後の浜地の活動を、浜地 26 点(油彩 9 点、水彩・スケッチなど 17 点)、ほか 15 作家 26 点、資料 11 点により

ある程度はたどりましたが、いまだに行方が不明な作品も数多くあります。もしご存知の方がいらっしゃればぜひ情報をお知らせいただくと嬉しく思います。

(奥村一郎)

- *1 山崎紀彦氏による浜地清松夫人ハツ氏への聞き取りを元にした年譜など。
- *2 紐育日本美術協会主催の展覧会出品目録(1917年、1918年)について、佐藤麻衣氏より情報提供いただいた。第一回展(1917年3月12日-3月24日、ヤマナカギャラリー)、第二回展(1918年2月2日-2月10日、マクドウェル・クラブ)浜地のほか、蘆原曠、犬飼恭平、宇和川通諭、国吉康雄、古田土雅堂、霜鳥之彦らが出品している。
- *3 「和歌山県洋画壇関係年表」『和歌山の作家と県内洋画壇展 1912-1945』和歌山県立近代美術館、1984年。
- *4 国吉康雄による回想「…この時分の日本から鹿子木孟郎先生が宇和川通諭氏と一緒に私のこの貧弱な画室をたづねて下されたことがあります。貧困のどん底なのでこのなつかしい遠来の同胞をねぎらふことが充分に出来ません。そこでキャベツの空缶を利用して、頗るあやしげな食卓料理を作りました。この時浜地清松氏も一緒でした。浜地氏は私よりすでに七八年も前に日本へ帰へられて帝展特選の栄冠を得られた新進青年画家としてご承知のこと、と思いますが同時苦楽を共にした盟友の一人です。…」西田武雄『画工志願』日本エッチング研究所出版部、1933年、67頁、「44 夜学」より。
- *5 『熊野美術協会』第50回記念特輯号、1998年。
- *6 第3回在巴里日本人美術家展(日本人会展)(1927年11月7日-30日、日本人会館)や、日本美術大展覧会(第1次総合展)(1928年6月8日-28日、ルネ・ジヴィエー画廊)に出品。
- *7 宮本久宣「研究ノート 浜地清松《裸婦》をめぐって 鹿子木孟郎からの手紙とともに」『和歌山県立近代美術館ニュース』64+65号、2011年1月7日、6-8頁。

「こども美術館部」で遊ぶこと：5年間の活動をふりかえって

小学生の頃のわたしは、絵を描いたり、ものを作ったりすることが好きではあったが、美術館や博物館に行った記憶は年に1度あるかないか、その程度だった。しかし買ってもらったポストカードは何度も机の上に広げて好きな順に並び替えてみたり、とっておきの一枚を写真立てに入れてかざったり、図録を取り出しては眺めたり、あるいは大事そうにカバーをかけて学校に持って行ったりしたことを覚えている。それは遊びにも満たない単なる体験の反芻ではあったが、こうした幼少期の美術館体験は、年齢が上がってからのそれとは異なり特別なものであったように思う。また美術館で過ごした時間だけでなく、家に帰ってから長く尾を引くところまでを含めて、美術館体験だったという実感がある。そしてそこ

には、ミュージアムショップで売られているグッズのように、持ち帰る「体験のかげら」がとても大きな意味を持っていたことも。

2016(平成28)年に始めた小学生対象の鑑賞会「こども美術館部」は、美術館が子どもたちの日常となることを目指して実施している活動だ。およそ2か月に1回、展覧会にあわせたテーマを設けて、さまざまに作品を見る機会を設けている。「お題」を設けてはいるものの、学校の「課題」とは違う「遊び」なのだと思えるかたちを狙ってきた。このことは、時に単なる言葉遊びで決めた突拍子もないテーマ設定(それは大抵子どもたちに突っ込まれる)や、毎回の始まりにみんなで小さな輪になってあいさつをすること、手に持って使うちょっとした

道具のテイストなどに込められている。しかし一番は、担当者であるわたしが心から面白がって遊んでいる様子から、子どもたちは敏感に感じ取っているに違いない。

この活動を遊びだと思ってほしいのは、まずは彼らにとっての美術館が、いつでも気軽に行ける遊び場だと知ってほしいからだ(なにより学校が休みの日にわざわざ出向くところが、遊び場でなくては行く気にもなれないだろう)。ただし遊びというのは奇妙なもので、「遊びなさい」と言われてやることでもないし、目標を持って遊ぶというものでもない。道端に落ちているふしぎな石を拾って、何に使うでもなくただ愛でて眺めて宝物にするもよし、石と石をぶつける音に耳を澄ませるのもよし、何かに見立てて石以外のものに変身させる



想像力を高めてくれる黄色いゾウの「そうぞう」シールを貼って、それぞれが想像したことを語った(2017年6月)



「わかBee新聞社」の腕章を腕につけ作品を取材し、各自の記事を1枚の「新聞」にまとめて発行(コピー)した(2018年4月)



紙コップで作った腕時計型タイムマシンを各自カスタマイズして身につけた(2018年8月)

もよし、発見からその先まで、どこまでも自由にしてい。それが本人にとって楽しいことならば。

しかし何も言われずとも勝手に遊ぶためには「遊べる能力」が必要で、これは遊びを通してしか開花しない。タスクをクリアすることが目的に設定されたゲームが溢れるなか、ゴールのない遊びの楽しさを知る機会は、絶対的に減っているだろう。美術館で遊ぶ体験はその補完になっていると思うが、必ずしも美術館での遊びが他よりも上位にあるわけでもない。ただ、美術館には数多くのふしぎなものが並んでいて、如何様にも遊べるネタは転がっているのだから、そのなかから自分の関心に触れるものを見つけ出して、勝手に遊ぶためのひとつの選択肢になっていけば良い。こども美術館部はいまのところ、「今日はこれで遊ぼうよ」というわたしからの提案方式でやっているの、子どもたちも「今日なにをするの?」とやってくる。けれども他のところでは彼らも同じように自分で遊びを考えてほしいし、あるいはいつか彼らが勝手に考えた遊びを、わたしに逆提案してくれれば良いなども思っている。

こども美術館部の特徴に、何か「小道具」を使うという点がある。作品を見るとき

道具であったり、考えたことを書き込む用紙であったり、それなりに「使える」ものであることが半分で、しかし大半は、別になくても活動できそうなものばかりをコツコツと作っては子どもたちに手渡している。たとえば想像力を高めるために「そうぞう」と名付けた象のシールを胸に貼るとか、過去に戻って考えてみるために、紙コップを切り抜いて作った時間旅行ができる(と信じるための)腕時計を着けてみるとか、おおよそ活動の作業内容には必ずしも必要ではないものを準備している。

こうした道具類は、美術(館)教育の分野では「鑑賞ツール」と呼ばれ、いかに子どもたちの鑑賞活動を有益にするかを目指して、教材開発が行われている。そういう状況を考えて、こども美術館部で使っている小道具の数々は、「鑑賞ツール」と呼ぶには大層心苦しい。どちらかと言えば「変身ベルト」「変身スティック」のような位置付けで、そこに子どもたちの想像力が加わらなければ意味をなさないものばかりである。しかしそれらが彼らの想像力を一度でも刺激したのなら、家に持ち帰ったあとでも「体験のかけら」として、机の引き出しにでも置いておいてくれているだろうか。

と、ここまで書いて気がついた。こども

美術館部はそれ自体、わたしにとっての美術館の自由な遊び方のひとつなのだ。作品を見ることも楽しいが、大人になったわたしは、『「作品を見るための遊び」をひねり出す遊び』をしている。さらに子どもの頃と違うのは、見たことをひとりで思い出す楽しみ方をするのではなく、複数人で見るからこそできる、互いの違いを楽しむ遊びを知ったことだ。

こども美術館部は感染症の影響で昨年は半年の中断があったものの、すでに丸5年、この春から6年目に入った。5年も続けているとすでに卒業してしまった子もいるが、おおよそ半数くらいが繰り返し参加する子どもたちで、顔と名前を互いに覚えている「常連さん」である。ごくたまにしか美術館を訪れなかったわたしにとって、美術館の体験は特別なものだったが、館内の経路もしっかり覚えるほど美術館に慣れ親しんだ彼らにとって、毎回の体験がどのような意味を持っていたのか、10年後ぐらいに大人になった彼らに尋ねてみたい。

なお、この活動が始まるまでの前段の経緯については、1年目を無事に終えた時点で本誌 89+90号にまとめている。

(青木加苗)



水中に設定した展示室内では、背中に「酸素ポンプ」を、口にはマウスピース(のついたマスク)をつけて、作品をジェスチャーで伝えた(2019年8月)



「〇らしさ」をさがすためのサーチライト「らしさーち」を手にした子どもたち(2019年12月)

「保存」の話をしよう。

⑰ 虫のための『歳時記』

今年1月、気象庁の「生物季節観測」の対象が減りました。気候の長期変化、一年を通じた季節変化とその遅れ・進みを把握するため、植物34種目、動物23種目の開花や初鳴きなどが観測されており、四季折々のものごとや年中行事をまとめた『歳時記』のようだ、とっていました。

これからは、気候の変化・季節の移り変わりをとらえるため、あじさいの開花、いちじくの黄葉・落葉、うめの開花、かえでの紅葉・落葉、さくらの開花・満開、すすきの開花の6種目、9つの現象のみが観測されることになりました^{*1}。動物の観測がなくなったという、このニュースは私にとって事件でした。気象台や測候所のまわりの環境がかわり、対象とされていた動物を見つけることが難しくなってきたためだそうです。

いままでも動物のうち14種が虫で、初めて見た日、初めて鳴き声を聞いた日などが発表されており、それをさまざまな作業の目安にしています。文化財害虫は観測の対象に入っていませんでしたが、同じ環境で生きている生き物ですから、害虫対策の時期を思い出すきっかけに丁度よかったです。



落ち葉だまり

生物季節観測の替わりになるものとして、まず落ち葉だまりの観察をはじめました。落ち葉だまりは、生き物たちが格好の住処とし、落ち葉を食べながら成長し、次の世代を生み、死んでいく場所です。そこでの彼らの行動を知れば、時期によって変わる館内へ侵入する虫の種類と量を予測して対策をとりやすくなるでしょう。梅雨に入る前、落ち葉の層を掘ってみました。

カメラを構えると素早く逃げるゴキブリたちがいました。クロゴキブリの若い虫と、野外で生活しているモリチャバネゴキブリです。ミズとダンゴムシも落ち葉のかげにもぐります。モリチャバネゴキブリはお腹に卵を抱えており、白くつぶつぶした何かの卵もありました。初夏は生命の季節なのです。ほかには、トビムシ、ワラジムシ、ハサミムシなど。今回観察できた文化財害虫はクロゴキブリでした。落ち葉だまりはただ撤去してしまうには惜しい、生命の循環を直接に観察できる小さな宇宙です。

俳句に使われる季語を集めた本も『歳時



卵もあります

記』です。気象庁の生物季節観測に入っていなかった、少なからぬ種類の文化財害虫が採られています。たとえば、夏の季語にはゴキブリ、シミなどがあります^{*2}。文化財害虫を詠んだ句には、生活のなかで生まれた実感と味わいのある句が多いように思われます。句はできなくても、観察という手段によって、虫のための『歳時記』なら編むことができるかもしれません。(植野比佐見)

*1 <https://www.data.jma.go.jp/sakura/data/index.html>

*2 『俳句歳時記 第五版 夏』角川書店、2018年、184-185頁。

Museum Calendar

開館/9時30分～17時00分(入場は16時30分まで)
休館/毎週月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)

7.17(土)～9.26(日) コレクション展 2021-夏

なつやすみの美術館 11 野田裕示 「集まる庭」

だれもが気軽に美術館を訪れ、美術の楽しみ方を体験できる展覧会。今回は御坊市出身の画家、野田裕示さんの作品を、野田さんが関係した作家の作品とともに紹介し、作品の見方を提案します。



野田裕示《WORK1666》2006年 個人蔵

8.15(日)～10.10(日) コミュニケーションの部屋

展覧会や展示室は、美術作品や自分自身との、また見る者同士のコミュニケーションも生み出す場です。作品を見る行為から情報伝達や共同作業などの観点までを、多様なジャンルの作品を手がかりに探ります。



野田哲也《日記 1971年5月15日》1971年

10.1(金)～10.24(日) おでかけ美術館 野田裕示展

橋本市教育文化会館(橋本市)

10.23(土)～12.19(日) 和歌山の近現代美術の精華

第1部 観山、龍子から黒川紀章まで
第2部 島村達雄と日本の近代写真

和歌山ゆかりの近代・現代美術の重要作を、日本画、洋画、彫刻、版画、そして写真やデザインといった新しい分野にも注目しながら紹介します。和歌山で育まれた文化の魅力をご覧ください。



川端龍子《雷雨》1936年

メールマガジン Facebook twitter ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ウェブサイトよりご登録いただけます。またFacebookやtwitterでも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。



友の会 会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加(美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内カフェでの割引
7. ホテルアバローム紀の国、湯処むろべ、和歌山マリーナシティホテルでの割引

入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。

詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690 担当: 中川